

各地  
からの  
たより

## 熊本県支部だより

犬飼 邦明

以前にも書いたことがあります。熊本というところは官民一体となった活動を抵抗なく受け入れるところであり。加藤清正の築城で知られる熊本城、高台に立つ天守閣より高い建築物は建てないという不文律が長く守られてきました。これは熊本県庁舎を建てた時でさえ固守されました。また、のちに総理となった細川家末裔の知事時代に作られた「第二空港線」は熊本空港と熊本市を結ぶ幹線道路として、また街路樹の美しいことでも評判ですが、益城町部分では、沿線に建物はおろか看板すら立てることを厳しく禁じられ、今なおそれが守られています。歴史的建造物や自然の景観を守り抜くにはそれなりの決意と理解がなければならぬのは言うまでもありませんが、「お上の一声」の威力は相当強いようです。

熊本大学精神科に池田学教授が着任されたのは10年前でした。それまでのガタガタに懲りて満を持しての選任でした。その池田教授、専門は認知症ですが、人材育成に向けられた情熱は素晴らしいものでした。行政にも影響力が大きく、「熊本方式」として、スタッフ養成のための認知症施策のいくつかは全国のモデルにもなりました。熊精協を含め、官民を挙げての支援協力に負うところも大きかったと思います。このたび大阪大学に転任されましたが、離任の間際まで熊本地震被災病院の支援に駆け回っておられました。「今楽しむなら花を活けよ、1年間楽しむなら花を植えよ、10年間楽しむなら木を植えよ、100年間楽しむなら人を育てよ」という言葉を地でいったような教育者でした。

熊本地震により熊本城天守閣の屋根や石垣がもろくも崩れ、熊本と阿蘇を結ぶ国道や鉄骨造の大橋が崩れ落ちました。今なお、高速道路や新幹線は徐行運転となっています。当然、木造民家の多

くは大きく傾きひしゃげ、ようやく解体が進んだ跡地は歯が抜けたように空地となっています。東日本大震災との違いは死者や火災が少なかったこと、部分的にしる集落が残されたことなどです。「仮設住宅に移っている親が望むから」と言って、跡地を整地して家を建てる準備をしている若夫婦も少なくありません。自然の驚異の中では人工のものは極めて脆く、泡沫のように消え去ってしまっていますが、親子の情や隣人への思いやり、何か手伝いたいという優しさは残りました。風土の大切さを強く感じました。

名も知れぬ田舎町の益城（ましき）が一躍有名になり、はや1年になろうとしています。熊本地震は多くの教訓ももたらしましたが、人の能力からみると、非常時に力を発揮するのは学歴でも資格でもなく、前例や常識にとらわれない柔軟な発想であることがよくわかりました。官民でいえば、官が一番苦手とするところでもあります。平時にはそつなく仕事をこなしている人が、非常事態の前に立ち尽くしてしまっている例にいくつも遭遇しました。いまだに「なぜ自分たちが」とうつむく者がいれば、「転んでもただでは起きない、ピンチはチャンス」という者もいます。頑なに規則通りに当てはめようとするより、「どこかに救いの道があるはず」と抜け道を探すほうが役立つ場合が多いのです。「強いもの、賢いものが生き残るのではなく、環境に適応できたものが生き残る」とした進化論にも通じるものがあるようです。

南海トラフ地震が現実味を帯びてくるなか、「いつ起きても不思議ではない事態や危機」に備える場合、何より重要なのは官民一体となった柔軟な対応と、そういう人の育成ではないでしょうか。そのような気持ちで、「次は支援する側に回りたい」と念じている熊精協です（2017. 3. 20記）。

（益城病院 理事長）